

平等覺經の自然の思想

福 原 蓮 月

淨土經典中、所依の經典は曹魏康僧鎧訳『無量壽經』二卷であるが其異訳に後漢支婁迦讖訳（訳者につき異説あり）『無量清淨平等覺經』四卷がある。常盤大定博士著『訳經總録』（後漢より宋齊に至る）には訳者に疑いをもち、竺法護の所出であろうという。他の学者もそれを認うているから今は此説に従いたい。此經には屢々自然の語があり、私はその思想を考究したく考えたのである。

『無野壽經』の異訳に『大阿弥陀經』、『如来会』、『莊嚴經』もあるが、『平等覺經』には自然の語が最も多い。サンスクリット本にもチベット訳にも殆んど見られない自然の語が何故に数多く存するかということに疑問を感じたのは私一人ではあるまい。真宗聖教全書第一巻によつてみるに、『無量壽經』は四七頁、『平等覺經』は六〇頁であり、『無量壽經』に五六回出る自然の語は、同じ比率を以つてすれば『平等覺經』には自然の語は七一回でよい筈なのに、『平等覺經』には百回ほど出る上、此の自然の語と同じ意味の「自から」という

語を加えるときは、合計して二百回ほどの自然の訳語があり、これは異常なことである。

此二經の訳者の在世年代を考えてみるに、康僧鎧は嘉平四年壬申の歲（紀元二五二年）に中國で訳經した。月氏国婁迦讖は紀元一六八—一八九年に、中國で訳出したということになるが、竺法護訳とすれば年代は下る。此人は中國の憑承鈞著『歷代求法翻經錄』に依れば紀元二三九—三一六年の在世で、康僧鎧と略ぼ同時代とみてよい。これによれば訳出に七、八十年の隔たりがある程度である。

中國の梁啓超著（『梁任公近著』第一輯中卷）「翻譯文学与仏典」によれば、仏典翻譯は漢末に起つたが、初は未熟であり、直訳的であつた。支婁迦讖訳とすると、此の人の訳經もそういう性格をもつことになる。もし法護訳とすれば、梁啓超の書に依れば、未熟な意識をなした一派に属する人と評せられる。その訳文は麗わしく、法理の方面が文に滞つて、文義混雑をきたすところもあつて、謝者は法護や支謙訳の經文

をみて、意識の弊害を見ぬくようになっていたと説く。『平等覚経』そのものの訳が拙劣であると評せられるにもせよ、訳者は仏典の中味を中国人に充分に知つて貰おうと考え、直訳ばかりに熱中せず、格義という仕方が翻訳に用いられたものと思う。

中国の憑友蘭著『中国哲学史』（一九二四年刊）に依れば、初期の仏典翻訳に格義の用いられたことを指摘し、次の如き法雅伝の中の格義の意味を紹介する。『高僧伝』四（大正五〇・三四七a）にいう。

法雅。河間人。……少善外学長通仏義。……時依門徒並世典有功未善仏理。雅乃与康法朗等。以經中事数擬配外道書。為生解之例。謂之格義。

と。この法雅は外典と仏經と互いに講説して当時の中国の人達に仏教を理解させたという。

このように所謂の格義という仕方では、翻訳するに当たつて經典内容を中国人に解り易くし、印象づけ、仏法が弘まるように意識することを企てたとみてよいのではなからうか。

仏典が中国で訳出された初期には老莊の学が盛んで、それは仏教思想と似通うものがあり、ここに格義が用いられたと憑承鈞氏は物語る。老莊の学の最盛期は中国の南北朝時代であつたと言われるが、そういう時代に無量寿經や平等覺經が翻訳されたので、經典中には異常に多くの自然の語が入るこ

平等覺經の自然の思想（福原）

とになつたのも無理からぬことであつた。

老莊の学において、主要要素をなす思想は無為自然であり、『平等覺經』（真聖全一・一〇三）には次の如く説く。

無量清淨仏国、為諸無央数仏国中都自然無為也。

又いう（同二二六）

無量清淨仏国、皆積徳衆善、無為自然。……

また『無量寿經』（同上・三五）にいう。

無為自然、次於泥洹之道。

又いう（同上・四一）

無為自然、皆積衆善、無毛髮之惡。

と。これは格義の好適例と云えよう。

ところで老莊思想を福永光司氏は次のように解説する（平凡社刊『世界大百科辞典』）。その根本概念は無為自然であるが、その自然とは造化のはたらき、天地宇宙の理法である、この自然は一切のものを生成し死滅させながら、それ自身は生滅を超えた超感覺的實在、そのはたらきをいう、それは道とも呼ばれる。そして無為とは此の自然即ち道に、心を空しくして従い、全ての人間的作為を捨てることを意味する。これは有限的な人為を捨てて、道即ち自然の無限と一つになることにはかならない。無為なれば為さざるなしという考え、此れは自然のはたらきにはかならない。以上のように解説されているが、浄土教の主要經典である『無量寿經』や『平等覺經』

の中核をなす思想は、此の老莊の学の自然無為の思想と趣のものを持ち、二經の翻訳が格義的翻訳をされるに至つたのも無理からぬところである。

此等二經の自然には、無為自然、業力自然及び願力自然の三種があつた。

さきに無為自然の訳語のある処を紹介したが、その無為自然は依報という浄土の風景を示すに止まらず、清浄世界をあらしめる真如を示すのである。以下『平等覺經』（頁数は真宗聖教全書一に依る）の無為界の自然を述べる例を示そう。

悉自於一蓮華上、坐則自然亂風起、其亂風者、亦非世間之風也。

是亂風者、都為八方上下衆風中之自然、都相合會、共化生耳。其亂風亦不大寒亦不大溫、常和調中適其淳好無比（九〇以下）

華小奏則自然亂風吹、……則復四方復自然亂風起吹七宝樹、皆自作五音声（九一）

亂風吹華復自然散……華墮地則自然風復吹奏華、悉自然去、則復四方自然亂風起吹（九二）

其華香万種自然之物者、亦非世間之物也（九二）

則自然亂風吹奏華去（九二、九三、九四、九五、九六）

前悉有自然七宝鉢中、皆有自然百味飲食（九五）

此百味飲食者、都為八方上下衆自然之飲食中精味。其香美無有比。都自然化生耳（九六）

食亦不多亦不少、悉自然平等（九六）

即四方自然亂風起吹國中七宝樹、七宝樹皆復作五音声（九六）

亂風吹七宝樹、華復如前皆自然散無量清浄仏及諸菩薩阿羅漢上（九七）

華小奏則自然亂風吹奏華悉自然亂風吹華如是四反（九七）

皆持天上万種自然之物、百種雜色華、百種雜香……（九七）

是諸天皆自然在虛空中（二〇八）

見無量清浄仏国界辺自然七宝城（二一〇）

舍宅中自然内外皆有七宝浴池（二一〇）

浴池中亦有自然華（二一〇）

復於七宝水池蓮華中生則自然長大（二一二）

以上の平等覺經の無為自然の浄土の風光に相当するものが、『無量壽經』にもあり、同じく自然の語で訳出されているが、繁を厭い文章は省略する。（但し『真宗聖者全書』一の頁を以て示せば次の如し——一九、二〇、二二、二三、二八、四三、四六）

上述した自然は依報であり、これは要するに自然無我の縁起であり、それは華嚴に所謂の性起の世界無云つてもよく、それを『平等覺經』（二〇）には説いて云う。「是万種之物、都為八方上下衆物自然、共合會化生耳」と。

この依報は正法と不二なのであつて、正報は心であり、法界の主人公とも云うべきもの、その悟りの主人公が『平等覺經』には次の如く説かれている。

則皆自然随意。在所欲、喜樂不違其心中所欲願也（九一）

其諸菩薩意欲得万種自然之物。……（九二）

意欲得者則自然化生在前。意不用者、便則自化去（九二）

諸菩薩意各欲得四十里華、則自然四十里華在前（九二）

自然に欲して得られる華の小さいもの、これらを次々に説く。

（平等覺經九三、九四、九五）

諸菩薩心意俱大歡喜踊躍、皆在虛空中、共持華則散諸仏及諸菩薩阿羅漢上、華都自然合為一華、華正團圓、周匝各適等。華転倍前極自軟好、転勝於前華好、數百千色（九五）

自然伎樂、樂仏及諸菩薩阿羅漢（九五）

仏言無量清淨仏及諸菩薩阿羅漢欲食時、則自然七宝机、自然劫波育、自然麴氈、以為座（九五）

皆灌其中百味飲食、自恣者隨意則至。亦無所從來、亦無有供作者、自然化生耳（九六）

食亦不多亦不少、悉自然平等（九六）

諸飯具、鉢、机、坐、皆自然化生、欲食時乃復化生耳（九六）

諸菩薩阿羅漢皆心清潔、不慕飯食、但用作氣力耳。皆自然消散、糜尽化去（九六）

舍宅則在虛空中、皆自然隨意、在所作為（一〇三）

則受身自然長大（一一〇）

其飲食時前亦有自然食（一一〇）

依正不二の正報亦超絶無比のものがある。

至時都集、説經行道、自然迫促応答遲晚。道智卓殊、超絶……

（一一三）

容容虛空中適得其中、中表相応自然、嚴整檢斂端直、身心淨潔

……（一一四）

平等覺經の自然の思想（福原）

過度解脫、敢昇入於泥洹、長与道德合明、自然相保守（一一四）
快意之滋滋真真、了潔白、志願高無上、清淨定安靜樂之無有極、善好無有比。巍巍之耀、照照一旦開達明徹。自然中自然相、自然之有根本、自然成五光至九色、五光至九色、參迴転數百千更變、最勝之自然。自然成七宝、横攬成万物、光精參明俱出好甚殊無有極（一一四）

欲食不食、恣若其意、都悉自然皆可得之。次於泥洹之道（一一八）

次の自は自然の意味である。

他方仏国、皆悉作善、作善者多、為惡者少、皆有自然之物、不行求作、便自得之（一二六）

端正中表自然作善、所願輒得感。善降化自然之道求。欲不死、則可得長寿、求欲度世、則可得泥洹之道（一二七）

上記に相当する「无量寿經」の自然の語のある文は省略するが、出拠は括弧内の如し（一三、二〇、二二、二四、二八、四一）。

ところで業道因果の自然を説く平等覺經の文は多い（一一三、一二〇、一二一、一二二、一二三、一二四、一二五等）が、文章は省略する。

上來此經に浄土の依正無為自然の叙述と、業道自然の説のあることを述べたが、その浄土の依正をあらしめる根源は、如来の願力に依る。これは『浄土論』や『往生論註』に説述

される所謂「三種成就願心莊嚴」なのであつて、このことが『平等覺經』（一一四）には次の如く説かれた。

何不各精進努力自求索。可得超絶去。往生無量清淨阿弥陀仏国、横截於五道、惡道自閉塞。昇道之無極、易往無有人。其国土不逆違、自然之隨牽。何不棄世事行求道德。可得極長生。寿樂無有極。

これと訳文が殆んど似通う『無量寿經』（三二）の文を次に提げよう。

何不力為善、念道之自然、著於無上下洞達無辺際。宜各勤精進努力自求之。必得超絶去、往生安養国、横截五惡趣、惡趣自然閉。昇道無窮極。易往而無人。其国不逆違、自然之所牽。

これらの文において、便宜上『無量寿經』の文に依つて考えるに、「何不力為善、念道之自然」というのは修因をすゝめるもの、「著於無上下、洞達無辺際」というのは、利益を示す。「念道之自然」というのは、特に本願を憶念することを勧める重要な句である。その「道」とは本願の大道を指し、「自然」とは願力自然にほかならない。「著於無上下、洞達無辺際」というのは、所証の果体が法性平等であつて高下無く、豎に深く横に広く、その辺際を見ないことをいう。「著」とは願の義、「洞達」とは証入のことである。これは彼の果体に契う相にほかならない。

つぎに「宜各勤精進努力自求之」というのは修因を勧め、それ以下の「必得超絶去」以下「昇道無究極」に至るまでの

文は、横超の利益を示し、「易往而無人、其国不逆違、自然之所牽」は因果自然を結ぶ文である。しかし「努力」の語はあつても、上述した「念道之自然」であり、自力を含まず唯だ他力にほかならない。仏のすゝめたもう所は、その本意は唯だ他力に存する。

つぎに「必得超絶去」、乃至「自然之所牽」の文が『教行証文類』の「信巻」末（真聖全二、七四）に引用されているが、これは「信巻」末（同上七）に信益現生十益の説かれた後にあつて、信益を顕わすもの、また『文類聚鈔』（同上四四六）には同文が真実証の所に引用されてあるが、これは真実証を顕わすものである。しかも広本の『尊号真像銘文』（同上、五七九以下）に必得超絶去以下の文を詳しく解説されている意を参照して考えてみるに、この文は横超願力を顕わすものである。決してこれは自力修断なのではない。「横截五惡趣、惡趣自然閉」というのは、惡趣の因果を離れることであり、これは所離を明かすもの、即ち業力も願力には、たちうちできないのである。「昇道無究極」というのはその所得の真証を彰わすのである。これは此文の前に「洞達無辺際」と説くものと同意とみてよい。「昇」とは果に至ること、「道」とは大涅槃道を云う。「無窮」とは、所謂の究竟一乘を指し、これは得果の至極である。その証果は、分段生死を離れる程度

の低いものではない。それは極めて高く、究竟のものであつて、經に「真実之利」とか「為得大利」と説かれている、その大利を嘆ずるものである。

「易往」とは、『銘文』（広本）に依つて知られるごとく正定聚を云い、「無人」は、邪定、不定聚でないことを示す。何故に「無人」と説くかというに、真実信心は得がたく、自力修善の人は多いから、このようにいう。「其国不逆違、自然之所牽」というのは、先きの文の「易往」を彰わすのである。

『無量寿經』に五十六回ほど自然の訳語があり、『觀經』に六回、『小經』に一回あり、『平等覺經』には甚だ多いが、これは自然の語を用いて經典の意を取り、意識したものである。それは老莊思想を用いた格義的翻訳と評せられるにしても、決して『無量寿經』本来の思想である業力、願力、無為のこころを外れるものではない。むしろその真意を知らしめるために力を注いだ結果このようになったものと考ええる。これら三種の自然は、決して無関係のものではない。それは縁起関係、依他関係にあると云えるであらう。しかるに無為の世界、寂滅無為涅槃界という境地は、言説を超えた縁起即性起の世界であるから、これを表現することは至難のことであるが、それを自然を以つて統一的に示したことの意義は甚大である。というのは、依報にもせよ、依正不二にもせよ、具體的に種々に表現しても、それを「自然」として統一するの

でなくては、それが、法爾の道理のものであることが知られ難く、またそれは同時に業力にひかれて迷う衆生を救う如来の願力が起り、はたらくところの自然のものであることが知られ難く、業力、願力、法爾力の三者混然として円融無碍なることが示し難いからであると私は考える。よつて結論として私はこゝに、『平等覺經』、『無量寿經』の翻訳をされた訳者の功績を大いに讃嘆したのであり、感謝の意を表したく思ふのである。

（叡山学院助教授）